

ミニ

特集

イネカメムシの発生と防除の現状

埼玉県におけるイネカメムシの発生状況と越冬について

埼玉県病害虫防除所 ^{さか}酒 ^い井 ^{かず}和 ^{ひこ}彦*

はじめに

近年、関東以西ではイネカメムシ *Niphe elongata* (Dallas, 1851) による被害が問題となっている (図-1)。2010年代半ばごろより本種による被害が報告されるようになり (石島, 2024)、関東では2018年ごろより本種の発生が問題視されるようになった。その後も発生地域が拡大し、埼玉県でも2020年ごろより被害が顕在化した (酒井, 2023)。2023年は県東部地域で多発して収量および品質に大きな影響を及ぼし (酒井, 2024)、2024年には多発地域の拡大が確認された (酒井ら, 2025)。これを受けて当県では2025年より研究部門・行政部門をはじめ農林部の各機関が連携して対策に取り組んでいる。

ここでは、埼玉県におけるイネカメムシの発生状況と生態について紹介する。

なお、防除薬剤や防除体系については本誌・本号の別稿 (p.8~9, 12~13, 22~25) で関係諸氏から詳細な知見が紹介されているので、そちらを参照いただきたい。

当県でも研究部門を中心として防除技術に関する研究及び調査を実施しているが、累年のデータ蓄積が必要な段階であるため、当県での防除技術については機会をあらためて紹介したい。

I 埼玉県の水田における発生状況

1 水田における発生生態

従来、本種はイネの出穂とともに水田に侵入する (大内, 1954) とされていたが、2024~25年における調査の結果、早期栽培 (5月上旬までに移植し9月上旬までに収穫する作型) や早植栽培 (5月下旬までに移植する作型) の水田においては6月中下旬から成虫の侵入が確認されている。これらのイネでは出穂期が7月中旬以降であるが、出穂期より2~3週間前、つまりイネの幼穂形成期から侵入することになる。一方、普通期栽培 (6月移植の作型) の水田では出穂期以前の侵入は極めて少なく、出穂期あるいはイネの登熟前期にあたる8月中下旬から発生が確認される (図-2, 3)。複数の作型が



A 葉に定位する成虫

B 本種の加害による不稔穂
成熟期が近づいても傾穂しない

C 本種の加害による斑点米

図-1 イネカメムシによる被害

The Seasonal Change and Overwintering habitation of Rice Stink Bug *Niphe elongata* (Dallas, 1851) at Saitama pref. By Kazuhiko SAKAI

(キーワード: イネカメムシ, 生態, 水田, イネ科雑草, 越冬, 埼玉県)

*現所属: 埼玉県農業技術研究センター